

## 大学時代の思い出

昭和41年法学部卒 松井 千恵子

明治大学には、司法試験を目指す学生のための研究室が4、5個あって、私は2年生ころからその中の1つの法科特別研究室に所属していました。

大学の授業は、研究室の先輩が受験に必要だと教えてくれた講義と3年から必須のゼミ、出欠をとる講義のみ出席し、後は研究室のゼミと答案練習に参加する以外は自習室で勉強をしていました。その成果は、4年在学中に司法試験に合格できたことですが、今から思えば、在学中にもっと社会・政治・歴史のことを学び、学生運動に参加する元気があってもよかったのではないかと思わないでもありません。

しかし、当時、司法試験に合格すると2年間司法修習生という公務員に準ずる身分が与えられ、修習に専念しなければなりません。給料が付与されていました。司法修習生の中には、いろいろ経験豊富な人がおり、大学時代に学ばなかった現実社会の様々な問題を教えられることが多く、弁護士の使命である人権擁護、社会正義の実現を目指すためどうすべきか考え行動するようになったと思います。私が弁護士を志したのは、女性として自活して行くための単なる職業として、父が弁護士であることから収入がいいと思ったにすぎません。

現実には、法曹界も保守的で、女性ということで差別を受けたことは多々ありましたが、1967年、国連総会で、「女性に対する差別撤廃宣言」が採択され、1975年を国際女性年とすることが決定し、1979年12月、「女性差別撤廃条約」が採択され、日本政府も1980年7月コペンハーゲンの女性会議で、女性差別撤廃条約に署名しました。エンパワーメントした女性の権利に対する大きな流れは、徐々に女性の地位向上をもたらしたと言えます。まだまだ、労働の場では女性と男性の賃金に格差があるように平等とまでは言えませんが、女性の権利意識の高まりは、女性弁護士に依頼したいという女性も増えてきたように感じました。

現在、司法試験に合格するのは約2000名で（当時は約500名）、修習は1年に削られ、修習に専念しなければならないのに、給料は貸与制となり、借金を背負わなければならないうえに、修習が終わっても就職難で、せっかく司法試験に合格しても弁護士としての仕事もできず生活が成り立たない弁護士もいるという大変な状況です。

さて、大学の研究室では、毎年夏休みになると、大学の富士吉田寮或いは富士五湖の近くにある寮で1週間ほど合宿があり、毎年20名近くの研究生が参加していました。研究生の中には在生学生もいればOB、OGもいました。寮の食事は、当番制で参加者が作り、男子が意外と上手なのでびっくりしました。私の父は弁護士でしたが、明治生まれの頑固者で、「男子厨房に入るべからず」と言い、弟が台所に入ると雷を落とす程でしたので、新鮮な驚きでした。この経験は、結婚後、夫に料理を作ってもらうことに役だっています。

合宿中、午前中は一応ゼミをやり、午後は野球に興じたり勉強をしたり各々自由に過ごしていました。夜は、町に出かける男子研究生もいましたが、大概是、グループでトラン

プやゲームに興じたり健康的に過ごしていました。その当時は、鍵がかかる部屋はなく、襖で出入りできる部屋ばかりでしたが、何の問題も起こらなかったのが今思えば不思議なぐらいです。

合宿の1番のイベントは富士登山でした。天候の具合で毎年登山が可能ではなく、登山できたのは3年生の時でした。

昼過ぎ、富士吉田口から登り始め、8合目の山小屋で仮眠をとり、深夜に頂上を目指して一列に並んで登りました。山小屋は、見ず知らずの人がたくさんおり、しかも雑魚寝で、臭いせんべい布団で眠れるのかと思いましたが、案外眠れたのは私だけだったのでしょうか。頂上で御来光を拝んだ感激は、今も鮮やかに脳裏に焼き付いています。眼下に雲海が広がり、その雲海から太陽が昇ってくるのです。太陽が顔を出すに伴い、雲が切れ始め、下界の景色が一望できました。あの神秘的な経験は、後にも先にも2度とありません。富士山は、遠くから眺めるのも素敵ですが、頂上からの眺めはそれ以上の感激をもたらしてくれます。富士山は、2013年ユネスコ世界遺産リストに登録され、今や大変な登山ブームのようで、残念ながらゴミの始末に大わらわのようです。

万葉歌人の山部赤人は、富士山の高嶺に感動し、まず長歌を読んで富士山を賛美したそうです。その長歌の最後に「語り継ぎ 言ひ継ぎゆかむ 富士の高嶺は」とよんで、「田子の浦に うち出でてみれば 白妙の 富士の高嶺に 雪は降りつつ」とよんだそうです(田辺聖子「歌かるた小倉百人一首」)。

日本人として、富士山は賛美するとともにその美しさを守っていかねばならないとつとに思います。

私の大学時代の思い出は、司法試験予備校生のような生活でしたが、71歳の現在も弁護士として仕事ができる幸せを与えてくれた今は亡き父に感謝しています。